

湘南藤沢学会シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金 成果報告書

申請者： 京都大学人文科学研究所共同研究員 上野大樹

運用指導： 慶應義塾大学総合政策学部准教授 廣瀬陽子

1. 集会名称と概要

名称 〈公共圏〉としての大学——知のメディア空間の拡がりのなかで

概要

基調講演： 吉見俊哉氏（東京大学大学院情報学環 教授）

コメンテータ： 藤本夕衣氏（京都大学高等教育研究開発推進センター研究員）

百木漠氏（京都アカデミア発起人・共同代表）

日時： 3月9日(水) 18時30分～21時00分

場所： 慶應義塾大学三田キャンパス 研究室棟1階 A会議室

主催・資金協力

京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」次世代研究ユニット4
慶應義塾大学湘南藤沢学会(SFC)シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金

内容要旨

大学は今日大きな変化に見舞われ、いわゆる実学化が叫ばれもする。だが一方で、昨年NHKで放映された『ハーバード白熱教室』に端を発するサンデル・ブームに見られるように、社会にとって決してすぐには役立たない「教養」を希求する動向も、また顕著になってきた。大学と知をめぐる現在の状況を理解するためには、大学を単に自立的な制度とみなすのではなく、むしろ多様な文化装置のネットワークのなかにあってその一翼を担ってきた一つの知の〈メディア〉として捉え返し、そのような知の空間の歴史のうちに大学を再定位することから始めねばならない。

本シンポジウムでは、まず以上に述べたメディアという観点から大学の歴史を再描写する作業に取り組みされている吉見俊哉氏（東京大学）に基調講演をお願いする。吉見氏は、日本での「白熱教室」の可能性を探るNHKのサンデル関連番組に出演され、やや過熱気味にも見えるサンデル礼賛の論調のなかで、冷静にそのような講義が可能となる制度的・社会的な条件にも言及され、今回の人気を単なる一過性のブームに終わらせず、将来の日本の高等教育を構想しうるような継続的な取り組みへと繋げていくにはいま何が必要なのかという、核心的な問いへと我々を誘う内容であった。今回の吉見氏の講演では、大学と社会の関係性を問うこのアクチュアルな問題が、実は歴史的な深度をもったアジェンダとしても再浮上してくる様が見て取れるはずである。

また、基調講演に続けて藤本夕衣氏、百木漠氏にそれぞれの観点からコメントをもらい、討議を行いたい。藤本氏は教育学の分野では稀有な思想史的・教育哲学的観点からの大学論を展開さ

れており、他方百木氏は、京都アカデメイアという団体を立ち上げて、大学やディシプリンを超える視点から大学と非大学の狭間で学問をすることの意味を問い直す実践活動を進められている。いずれも今回の吉見氏の講演内容に密接に関連した研究・活動であり、両氏のコメントを皮切りに、活発な討議が繰り広げられることが期待される。

2. 参加者

講演者（吉見）、コメンテータ（藤本、百木）、司会（上野）のほか、十数名。

3. 成果と展望

吉見俊哉教授の基調講演は、一時間少々という短い講演時間ながらも、非常に明快でかつ問題の本質に迫る内容であった。具体的には、今日の大学が置かれた実際の状況から説き起こし、まずは日本の大学が現在のような状況へと向う経緯を数十年のスパンで振り返ったあと、あらためて中世ヨーロッパにおける大学の誕生にまで遡行し、近代ドイツにおける「第二の誕生」を経て、今日のグローバリゼーションと知識情報社会のなかでの大学の変容へと至る、きわめて長期的なパースペクティブのもとで、この知の空間の歴史が描写された。そこで見えてきたのは、要旨でも書いたような複数形の〈メディア〉という観点においてこそ、現代のアクチュアルな変化はよく理解されるということである。この見方は、大学のいわば二度にわたる「誕生」を、長期の歴史の概観によって視野に収め、両者を比較の視座に置くことで初めて実現されたように思われる。これによって、「大学」というものの想像力が拡張され、転換期にある今日の変化の実相も見えてくるのである。また、基調講演を受けてのコメンテータらによる質疑応答も、きわめて実りの多いものであったように思う。今回のシンポジウムの内容は、京都大学 GCOE よりワーキングペーパーとして刊行され Web 上でも公開される予定なので、詳細はそちらをご覧ください。

申請者は、SFC の卒業生として、創設当時において一つの壮大な実験であったらう SFC という「試み」の存在を念頭に置きながら、「歴史(再)叙述」と「メディア」がキーワードとなった今回の大学の再定義というべき「試み」に加わった。申請者自身、在学時にはその学際性・超領域性がむしろ無領域性に陥っているのではないかという一種の根無し草の感覚を味わい、大学院進学時には他大学に移ったが、しかし現在は自分自身にとって SFC の理念がいかに核心的な意味をもっているのかということを感じ痛感する。歴史を振り返ることで複合的な知のメディア空間のうちに大学を再定位することは、まさに SFC という試みに見出せる一つのコアであり、またその実践は、SFC の再定義即ち大学の再定義とでもいうべきものではないか。

メディアとはまた、記録であり記憶でもある。どんな試みもやりっ放しに終わらせるのではなく、さらなるコミュニケーションを誘発する媒体とならねばならない。昨年 2010 年の ORF（オープン・リサーチ・フォーラム）では加藤文俊教授や松家仁之特別招聘教授により「地域メディアとしての大学」というセッションが行われた。今回は日程の都合でお二人を登壇者として迎えることは叶わなかったが、たとえば今後この二つの試みの成果を継承し突き合わせるような形で、さらなるメディアートを進めていければと考えている。